

私たちに戦争は必要ない。戦争なんて時代遅れ、それはすでに終わってしまってる人たちの考えることです。



## アリシア・ベイ・ローレルさん

「地球の上に生きる」著者で  
日本で毎年コンサートツアーをしている

第一期名前のない新聞を始めた頃、『地球の上に生きる』を目にして興味をひかれ、しばらくして彼女が日本に来たことも聞いていた。そのころ、彼女の本を読んで影響を受けた人は多いはずだ。しかしこれまで縁がなく、今回日本でツアーをしているのを聞いてやっと会うことができた。会ってみるととても気さくですっと以前からの友達のような感じがした。

今は主に歌をうたうことでメッセージを伝えているアリシアに、日本のこと、ヒッピー・コミュニケーションのこと、今の時代について、音楽や本のことを聞かせてもらった。

(あ)

— アリシアさんは日本へ度々来られているようですが、日本、あるいは日本人に対して特別な感情をお持ちでしょうか？

**アリシア(以下A)**：はい。日本という国は、芸術家共同体として非常に高度な成長を遂げてきました。古い建造物、グリーン建築、伝統的な着物、ナチュラル新素材の服、陶器、伝統的な食べ物、新しいオーガニック料理、グラフィックや印刷物、演劇、音楽など全てが素晴らしい創造力と技術により、非常に細かいところまで気を配られ生み出されています。ニホンは自然を非常に敬う社会でもあります。ほとんどの事務的な都会の人たちでさえ四季の移り変わりや季節ごとに色を変える木々を愛で、温泉が大好きです。

ニホンには2つの偉大な精神体系があります— 自然の要素が反映する神道、そして瞑想によって内なる平穏を見つけるということを教える仏教。いちばん重要なことは、人が親切で互いを思いやるということ。非暴力的であり、盗みをしない。困っている人を助ける。本当に友達には誠実だし。私にとっては、天国みたいなところです。

— これまでどこに住んで、どんな生活をしましたか？

**A**：私は17才まで両親とロサンジェルスに住んでいました。それから、ヒッピーカルチャーが始まっていたサンフランシスコの大学に行きました。サンフランシスコ中のいろんなところに住んだわ。パークレーやサウスリートのポートハウスにもね。1969年にサンフランシスコから北へ60マイルのウィーラー・ランチ・コミュニティに引っ越したの。そこで私は「地球の上に生きる」を書いたんです。本が発行された後、バーモントにあったコミュニティに友人を訪ね、そこで一冬を過ごしたわ。翌年の春にラモン・セnderと協力していっしょに「太陽とともに生きる」を書いたのだけれど、その間私たちはコスタリカ、コロンビア、メキシコに住み、1974年に別れた後、生まれて初めて日本にやってきました。(草思社の招待で) その後ハワイに行き、マウイ島の田舎にある小さなコミュニティ3つに移り住み、それからミュージシャンとして働き始めるために観光客の多い地域へ。長年ミュージシャンとして働いた後、マウイ島でウェディングプランナーの会社を始めましたが、結婚式で歌うというかたちで音楽は続けました。1999年、私が50才になったとき、会社を売り払い、「地球の上に生きる」30周年記念のプロモーション全国ツアー

を計画、2000年にトークと歌のパフォーマンスを75回、自分でパンを運転してアメリカ合衆国中を廻ったの。出かける前に初めてのCD(「地球の上に生きる」からの曲)をツアーで売するために制作しました。ツアーが終わって、ビッグアイランド(ハワイ島)に落ち着き、2枚目のCD「リビング・イン・ハワイ・スタイル」を制作し、小さなパーマカルチャーの農場を買ったの。母の人生の終わりが近づき、介護が必要になった時、私は農場を売り、母の面倒をみるためにロサンジェルスに戻りました。ロサンジェルスではジャズ&ブルースのCD「生きることの全てとは(What Living's All About)」を街の素晴らしいスタジオ・ミュージシャンたちと作り、その年に、ニホンで最初の音楽ツアーを行いました。私の両親が同じ日(2007年8月15日)に他界した後、多くの友人が同じ年に亡くなり、死のことを歌ったCDを作りました。(その「次の世界へ(ビヨンド・リビング Beyond Living)」には、「どんと」の曲が2つ、彼の妻である小嶋さちほさんのバンド「アマナ」と録音したものも入っています)母が亡くなってから1年後、母の家は配管の災害で住めない状態になってしまったので、アリゾナ州フェニックスに安い家を見つけ、全てのものをそこへ移しました。そ

のあとまたCDを3枚作りました。「Living Through Young Eyes」、「Songs from Being of the Sun」、「More Songs From Living on the Earth」です。

私はこの5年間以上フェニックスに住んでいて、そこの砂漠の気候は大好きなんです。カリフォルニアやハワイ、ニホンのアーティスト仲間が恋しいということがあります。だから今年は、パートナーのジョーと次に住む場所を捜す予定です。

——「地球の上に生きる」を出版されたときのことをお聞かせください。

**A:** 19才でウィーラー・ランチに来たとき、自分が野外生活をする上で知っているべきことの多くを知らないということを知りました。その土地にいた他の大勢の人たちも充分には知っていませんでした。でも手書きの本の作り方は知っていました。それまでに既に2冊つくってましたから。それで、皆が必要とする全ての情報を集めて、コピー機で複写できる手書きのパンフレットを作ることになりました。その土地の人たちのところを歩き回り、彼らが知っていることで他の皆も知る必要があることを聞きました。そして終えたときには絵と文が200ページにも及んでいました。私は200ページの本を100冊も印刷する余裕はないと思って友人たちに相談したところ、ラモン・セnderが、その200ページを、田園生活のためのツールを販売していて素晴らしい哲学も持っているとても人気のある出版物のホール・アース・カタログにもって行けば？と言ったんです。私がこの編集長スチュアート・ブランドに原稿を見せたところ、彼は「もしこれが出版されたなら、僕がカタログにレビュー(書評)を書くよ。」と言ってくれて、ホール・アース・カタログを出版しているブック・ピープルが西海岸の多くの小規模出版社の大元



だからと勤めてくれました。そのブック・ピープルのオーナーはちょうどブックワークスという小さな出版会社を始めたばかりで、私の本をその会社の第2冊目として出版することを決めてくれたんです。ホール・アース・カタログの書評では「これがカタログの中で1番の本になるかも。」と書いてくれ、初版の1万部は2週間で完売。次いでホール・アース・カタログの版權を得たがっていた世界で一番の大手出版社であるランダム・ハウスが私の本のレビューを見たの。そしてランダム・ハウスの創始者であり社長のベネット・サーフが自らブックワークスに電話をかけてきて私の本にオファーしたの。ランダム・ハウスは相当な宣伝をして本はベストセラーになったってわけ。パーモントのコミュニティに住んでいた作家のレイ・マンゴーがニューヨーク・タイムズのブックレビューに書評を書いて、その後彼は友人である室矢憲治(ムロケン)に渡すために1冊を持って日本へ行ったんだけど、ムロケンがそれを草思社へ持ってって出版するように説得したの。深町真理子さんが翻訳、文字を書いてくださ

いました。そして本は1972年に発行、今でも印刷されてます!

——ヒッピーのライフスタイルについて、どのようにとらえていますか?

**A:** ヒッピーたちは 私たちの社会の未来のパイオニアでした。私たちはみな地球と調和し、お互いに平和を守り続け生きていかなければなりません。戦争や産業公害は時代遅れです。有機農法で育った食物や愛に満ちた社会の時代がやってきたのです、世界中にね。

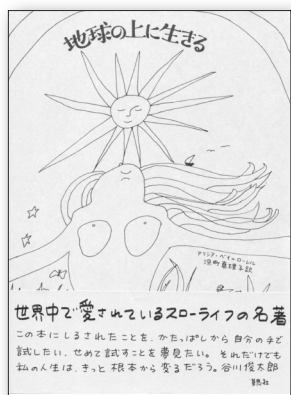
——ヒッピー思想は現代でも、半世紀を過ぎた今でも、意味があり重要であると思いますか?

**A:** 60年代後半から70年代初頭は、まさにその始まりでした。ヒッピーの生活はたった今でも世界中で健在ですよ、特にニホんで! 私たちは他の人々が競争や戦争、気候変動などの古い社会から協同とコミュニティ、健康的な生活の社会へと変わっていくのを手助けしようとする仲間です。もしあなたが、エコビレッジやパーマカルチャーの共同体、コハウジング(共住方式)などがどんなに広がっているか、また他のコミュニティがどんなかを知りたいのであれば、ic.orgをチェックしてみてください。(ザ・フェロシップ・フォー・インテンショナル・コミュニティ 意図的共同体のための会)

——今の時代をどう思われますか?

**A:** 一般庶民や自然が痛めつけられる一方で億万長者たちが更にお金儲けをする、という両極端に私は困惑しています。そして私たちの政府が電話やEメール、サイト等々を通して一般庶民を密かに監視してい

←淡路島・カフェナフシヤでのコンサート



## INFORMATION

■『地球の上に生きる』  
アリシア著 草思社 ¥2700  
1972年に初版が出て以来のロングセラー。やさしい手書きの文字とイラストがたくさんの人に受け入れられ、生き方に影響を与えてきた。

■『新版 太陽とともに生きる』  
アリシア+ラモン・セnder著 草思社 ¥2700 アリシアの2冊目の本。

●CD『リビング・イン・ハワイ・スタイル』  
53分・16曲  
¥2880  
ハワイに住んでいたころにつくったCD。ハワイの開放的でゆるやかな空気が伝わってくる。



★アリシアのサイト  
<http://www.aliciabaylaurel.com/>

→神戸・モダン・クックカフェでのコンサート

ることに不安を覚えます。アメリカ合衆国だけではなく、世界中で起こっていることなのです。片やインターネットが私たちを繋げて考えや愛を世界中に分ち合ってくれるのは大歓迎です。私たちに必要なのは、希少な鉱物や強制労働なしでつくられるコンピューターじゃないかしら。

—— 人の生活がより忙くなり、機械(PC、iPhone等々)に支配されているように思います。



**A:**「昨日の夜 奇妙な夢を見た」は、世界平和の理想です。誰でもすぐに覚えられる心地よくシンプルな歌です。この曲は第2次世界大戦時のアメリカ合衆国で平和運動をしていてフォークシンガーだったエド・マッカーディによって書かれました。彼は広島と長崎に原爆が落とされてすぐ後にこれを書いたのです。私がこの曲を初めて聞いたのは、子供の頃 両親がいつも聞いていた平和主義のラジオ局ででした。

**A:** 大金持ちたちが労働力が安価で労働者保護の法律がほとんどない国々に多くの仕事を送り込んできました。これらの国々の人々には過酷なことであり、もっと産業化が進んだ国では自分たちや家族のために十分な富を増やしているのです。だから人々はますます忙しくなるか、またはホームレスになるのです。人間的で思いやりのある政府ならこれを許すはずがありません。北欧の国々を見てください。

—— また、私たちはたちは諸々の問題に直面しています—— 戦争、TPP、遺伝子組み換え、世界規模の多国籍企業が世界を支配しています。

**A:** 地球上にいる70億の人口に対し、億万長者は僅か1,400人です。彼らがお金を儲けるために人類と自然を破壊しています。彼らを変えることは出来ません。私たちが新しい社会をつくるべきなのです。

—— これまでどのように人生を歩んできましたか？

**A:** 私はずっとアーティストとして生きてきました。私は自分の内なる声が「しなさい」ということをします。また、日々まわりの人に親切でありたいです、それが一番大切なことですから。

—— 50才の時初めてのCDをリリースされたそうですが、どのようなきっかけでミュージシャンになられたのですか？

**A:** 私は音楽といっしょに生まれてきたようなものなの。私の家族は素敵なピアノを持っていたのだけれど、私が歩き始めた赤ちゃんの頃から、やりたいことといたらピアノを弾くことだったの。ピアノを習いたくて、7才の時にやっと両親が承諾してくれたわ。5年間クラシックピアノを習いました。12才の時ボブ・ディランのコン

サートに行ったんだけど、その頃彼はまだ有名ではなかったの。クラシックピアノは音楽理論と10本の指全てををそれぞれ個別に使うことを教えてくれる素晴らしい技法だと思いました。けれどそれは私の気持ちや心の表現ではありませんでした。私はギターと歌うこと、そして曲を書くことを学びたかったのです。私の両親はギターと歌を習うことに賛成ではなかったの、先生を雇うために自分で働いて支払える年齢になるまで独学で学びました。それからボーカルのテクニックを8人の先生から、ギターを5人の先生から学びました。13才で最初の曲を作りました。10代、20代、30代の間たくさんの曲を作りました。35才でプロとして歌い始めた時は、レストランやバー、パーティー、クルージング、ウェディングでだったので、誰でも知っているような曲を膨大な数のレパートリーとして覚えなければなりません。50才で初めて自分のCDを録音した時は、「地球の上で生きる」の30周年記念版を宣伝するために私が企画したブック・ツアーで売るためでした。今までに書いた曲をカセット録音してあったものを聴き、それらの曲を学びなおさなければなりません。だってパーティーで歌っている間にこれらの曲を完全に忘れてしまっていたの。その最初の録音のあと、ツアーに出ることを始めたの。自分の曲を歌って自分の語りをするためにね。66才の今でもやってるわ。

—— 日本でのコンサートツアーではいつも「昨日の夜 奇妙な夢を見た」という曲を一番さいごに日本語と英語で歌われているようですが、意図はなんですか？ この曲への思いを教えてください。

今年二ホンでこれを歌います。原爆投下70年記念ですから。また、平和運動のデモで歌うのに良い曲でもありますから。今までアメリカ合衆国でたくさんの平和運動のデモでこれを歌ってきました。私たちに戦争は必要ない。戦争なんて時代遅れ、それはすでに終わってしまってる人たちの考えることです。

—— 次の本を出版する予定はありますか？

**A:** はい。タイトルは「今なお地球の上で生きる：50年あと」です。3、4年のうちに出版しようと思っています。

—— どうもありがとうございました。

(翻訳：Machiko Isobe)



Last Night I Had The Strangest Dream  
～昨日の夜 奇妙な夢を見た～

昨日の夜 奇妙な夢を見た  
世界が 戦争を止める夢  
大きな部屋で 大勢が  
二度と戦わないと サインした  
何億のサインが コピーされ  
手をつなぎ あたまを下げ  
祈り 捧げた  
通りの人々は 踊り出し  
銃と剣と軍服は 捨てられた  
夢を見た  
世界が 戦争を止める夢

